

キリストの光のキリスト

年間第21主日 8月26日

(ルカ13・22—30)

狭い戸口から入ると、そこには家の土間に座り込んだ二人の子どもがいた。子どもといつても一人は18歳。細い腕と足。小さな体。頭は普通の大きさ。体はひねったような状態で土間に座りこんで下を向いている。もう一人は10歳くらいだろうか。その子も土間に座り込んでいる。その子は大きな目を輝かせて、部屋に入って来たわたしたちに歌を聞かせてくれた。細い細い棒を定規のようにして絵を描いてみせてくれた。しっかりとした線で車の絵を描いている。

フィリピン・ミンダナオ島の奥地にある村を訪ねた。読み聞かせに行く子どもたちも同行した。四輪駆動の車でや

狭い戸口から入る

つと行けるような山村。その村に日本から奨学金を受け、学校に行っている子どもがいる。その兄弟思いの女の子の家に寄った時の様子がそうだった。

イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。「狭い戸口から入るよう

に努めなさい…」
極貧の村。貧しくされた人々。難病に悩む家族。とても救われているとは言えない状況。これ以上に不幸で残酷な所はないと思えるほどの家。しかし、狭い戸口から入ると、そこには救われた者

の姿があつた。

兄思い、弟思いの女の子

の名はアモール。「愛」という

名。静かに涙を流しながら

兄弟の状態を説明している

彼女からは、えも言われない

温かさがあふれ出ていた。こ



の家族はこの女の子の愛で

救われているのだと思つた。

家の中は一緒に訪れた子

どもたちでいっばい。一人の

子が座る場所を譲ってくれ

た。弟の真ん前。わたしの

てくれた。家に入りきれなか

った他の子どもたちが窓か

ら、入口からのぞき込む。そ

の子たちの温かいまなざし

がその家をいっそう温かく

する。ここはまさに救われた

者の場だと思つた。

苦しんでいる人たちに何も

できない自分。何もできない

自分勝手に無責任な思い。救

われている人はこの家族とそ

れを取り囲む人たち。救われ

てないのはむしろ自分だと思

つた。

イエスの名による祝福。こ

る時、わたしもまた、その祝

福に包んでいただくのだと気

づかされた。

この欄の原稿締め切り日を

忘れてフィリピンに飛んでし

まっていた。「狭い戸口から

入る」まで待ったをかけられ

ていたのか：と自分勝手に解

釈している。

狭い戸口から入って、そし

て見たもの。それは愛からあ

ふれ出る涙だった。

(山元眞||福岡教区司祭/カット||高崎紀子)

今週の福音

27日・月	マタイ	23	・	13	―	22
28日・火	マタイ	23	・	23	―	26
29日・水	マルコ	6	・	17	―	29
30日・木	マタイ	24	・	42	―	51
31日・金	マタイ	25	・	1	―	13
1日・土	マタイ	25	・	14	―	30

9月